

目次

- ・新指定文化財紹介 村上家千巻舎・門 2
- ・新登録文化財紹介 名鉄三河線 旧三河広瀬駅と旧西中金駅 3
- ・埋蔵文化財調査報告 堂外戸遺跡／堂外戸遺跡西地区 4  
金谷城跡／拳母城(七州城)跡 5
- ・特別展準備レポート「風外本高展—人と画と—」 6
- ・企画展「地下に埋もれた縄文の森」開催報告 7
- ・文化財シリーズ61・資料館 NEWS 8



表紙写真↑新指定文化財(市)村上家千巻舎(右)門(左)↓新登録文化財(国)名鉄三河線旧西中金駅(左)と旧三河広瀬駅(右)のプラットホーム



豊田市教育委員会では本年5月28日付けで幕末から明治時代に活躍した国学者村上忠順の千巻舎とよばれる書庫と村上家の門を市指定の文化財(建造物)に指定しました。

千巻舎は土蔵造りの主屋と棧瓦葺きの下屋によって構成されています。主屋は外部を大壁として柱を見せず、軒も垂木を見せない漆喰塗り、下部は東面を除いて縦棧打ちの下見板が張られています。東面両端から3間目を出入口としています。内部は実長半間(3尺)毎に柱を見せる真壁造りで漆喰塗り、床は拭板敷、天井は梁行方向に棹を通した棹縁天井。内部中央に7寸角の柱を立て鴨居を通し、敷居を置いて南北2室に分割されています。東面の出入口を除いて三方に窓等開口部は設けられていません。壁面より1尺2寸幅の書棚が4段めぐっています。

下屋は南と北の端からそれぞれ1間四方の部屋と中央の1間×2間の部屋の3室に分かれ、中央の間が主屋への出入口となっています。下屋への出入口は北側にあり、東側は4間通しの雨戸がついています。主屋の南から西側には下見板張り、漆喰塗りの土塀がめぐっています。

門は一間薬医門で切妻造り、棧瓦葺き、軒は二軒疎垂木、南面して建てられています。主柱は長方形断面で控柱は面取角柱、石製礎盤上にたち、主柱とは4尺3寸の間隔をもつ。主柱上に冠木をのせ、柱上部と冠木に挟み込むように絵様線形付の女梁をいれ、その上に男梁を重ね、男梁中央に角束をたてて棟木をうけて

います。男梁の前後両端に桁を組合せて垂木をうけ、主柱と控柱の間は腰貫と飛貫で固め、主柱間には楣を通し板扉が吊るされています。

千巻舎は村上忠順の蔵書を収蔵する書庫として娘婿の深見篤慶が自費を投じて明治7年に建立しました。伝統的な土蔵造りで防火、防湿にすぐれた構造で貴重な書物を収蔵するにふさわしい建築といえます。門は文政6年の移築と伝えられ、女梁の絵様から判断しても幕末から明治初期とされます。寺院の門にくらべて木割りが細かく華奢で、装飾も少なく簡素な意匠をみせ、文人の邸宅にふさわしい瀟洒な形を伝えています。

忠順は幕末、明治初期の国学者。歌人。文化9年、村上忠幹、美志子の次男として堤村(市内高岡町)に生れ、蓬廬、四方樹と号しました。植松茂岳等に国学を学び、嘉永2年本居内遠に入門、渡辺綱光に和歌を習いました。嘉永6年父の後を継いで刈谷藩の侍医となり、藩医のかたわら藩主や藩士に漢籍や国典を講義、和歌の指導をしました。和歌選集の編さんや古典の研究、注釈につとめ『類題三河歌集』、『古事記標註』、『類題玉藻集』等を著しました。明治17年73歳で没し、自邸脇の歴代墓地に葬られています。

蔵書は大正3年、刈谷の篤志家穴戸俊治、藤井清七が一括購入し当時の刈谷町に寄贈しました。現在刈谷市中央図書館の村上文庫(25,104冊)として保存されています。

本稿は愛知工業大学講師岩田敏也氏の調査に基づいて執筆しました。厚くお礼申し上げます。す。

所在地：市内高岡町新馬場地内 (松井 孝宗)



村上家千巻舎



村上家門

平成19年6月15日、国の文化審議会は文化財建造物の登録について、登録すべき物件を文部科学大臣に答申しました。そのうち、豊田市に關係する文化財として、名鉄三河線の旧三河広瀬駅と旧西中金駅それぞれの駅舎とプラットフォームが登録の答申を受けました。これにより、豊田市内の国登録文化財(建造物)が7件(4ヶ所)から11件(6ヶ所)となります。

新たに登録文化財となる名鉄三河線の旧西中金駅と旧三河広瀬駅を紹介します。



旧西中金駅 駅舎



旧三河広瀬駅・駅舎

旧西中金駅は、平成14年に廃線となるまで名鉄三河線の終着駅でした。駅舎は外装が下見板張りの木造平

屋建で、切妻屋根に鉄板が葺かれています。規模は桁行が14m・梁間が3.6mで、建築面積は54㎡です。駅舎のプラットフォーム側にはプラットフォームへ上がる階段の傾斜に沿った上屋がついています。旧西中金駅は、終着駅にしては規模も大きくなく、特別の施設もありません。これは、旧西中金駅の駅舎が建てられた昭和5年(1930)当時、足助まで鉄道が延長される計画があった(昭和33年(1958)に断念)ため、この駅は終着駅として設計されなかったのです。

旧西中金駅のプラットフォームは全長36m・幅約3.6mを測ります。基本的には花崗岩の切石積みです。小規模な改変を受けていますが、全体的には駅が開業した昭和3年(1928)当時の姿を留めているといえます。

旧三河広瀬駅は旧西中金駅の一つ手前の駅で、昭和2年(1927)に開業しました。駅舎は木造平屋建で、切妻屋根に鉄板が葺かれています。下見板張りの外装は、腰の部分に厚手の目板を打つ独特なつくりとなっています。規模は桁行11m・梁間4.4mを測り、建築面積は50㎡です。待合室のほぼ全ての外壁に付けられた大きなガラス障子が駅舎全体に軽快な印象を与えます。

駅舎北側にあるプラットフォームは、全長約80m・幅2~2.6mで、矢作川に沿って緩やかな弧を描いています。このプラットフォームは中央部分が開業当初の遺構と考えられる切石積みで、その左右に後に付け足されたと考えられるレール棧橋形式とコンクリートブロック積みがそれぞれの端に延びています。

旧西中金駅と旧三河広瀬駅が登録文化財となる理由として、「国土の歴史的景観に寄与している」ことが挙げられています。しかし、それ以上にこの二つの駅の意義は、駅および鉄道と地域のかかわりそのものにあります。かつて旧西中金駅では竹の積み出し、旧三河広瀬駅では耐火煉瓦の原料となる木節粘土などが取り扱われ、貨物の輸送により賑わっていました(旧西中金駅は昭和38年(1963)、旧三河広瀬駅は昭和59年(1984)に貨物の取り扱い廃止)。現在でもその面影を伝える駅の存在は、それぞれの地域の鉄道交通とのかかわりを示す歴史的遺産として貴重な存在といえるのです。(天野 博之)



どうたくん

# 埋蔵文化財調査速報



すえちゃん

## ○<sup>どうがいと</sup>堂外戸遺跡(市木町堂外戸)

堂外戸遺跡は、市営市木町住宅の建設に先駆け、平成16年度から調査を開始し、今年度は現地調査の最終年度となります。これまでに15,300㎡を調査し、弥生時代中期(紀元前2～3世紀)の方形周溝墓10基、土器棺墓3基、古墳時代初頭(3世紀)～奈良時代(8世紀)の竪穴建物83棟、古墳時代中期(5世紀)から中世にかけての掘立柱建物79棟、中世の井戸4基、火葬施設3基などが見つかりました。遺物としては、生活で使ったり、墓に供えた土器などが発見され、弥生時代から中世に至る村の生活や墓の様子が、次第に明らかになっています。

今年度は8月までに2,880㎡の調査を完了し、弥生時代から近世に及ぶ遺構が発見されました。竪穴建物20棟、掘立柱建物19棟(うち総柱のもの5棟)、中世の屋敷地の区画溝や井戸などの遺構が、調査区全体に密集して確認されています。

注目されるものの一つが、弥生時代中頃(今から2,200年くらい前)の、土器をお棺として用いたお墓です。穴を掘り、壺形の土器を横倒しにして埋め、土器の破片で蓋をしています。

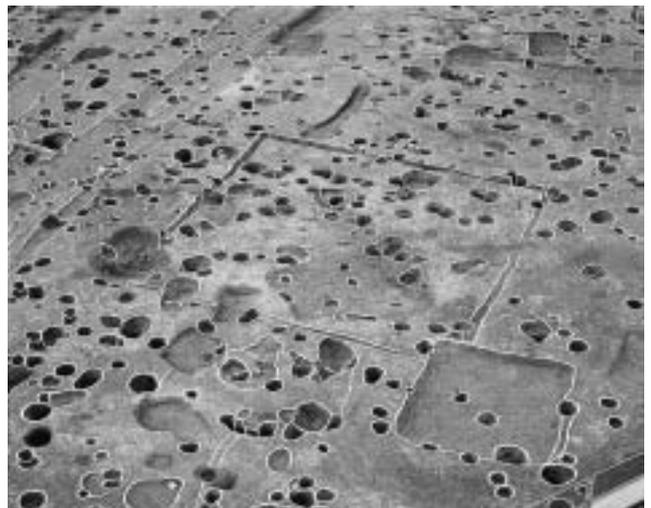
また、古墳時代の中頃(今から1,550年くらい前)の大型竪穴建物も発見されています。この建物は、一辺8mの四角い掘り込みを持つ竪穴住居で、床に炉が設けられ、土師器や須恵器が集中して出土しています。

堂外戸遺跡の調査はこの秋に終了し、今後は報告書出版へ向けた整理作業が行われる予定です。

(高橋 健太郎)



弥生時代中期の土器棺墓



古墳時代中期の大型竪穴建物

## ○<sup>どうがいと</sup>堂外戸遺跡西地区(市木町堂外戸)

調査場所は、市木町住宅の発掘現場から西側の低地へ至る途中に位置します。宅地造成の計画に先立ち、6月に行った試掘調査で遺物と遺構の存在が確認されたため、8月に本調査を行いました。

本調査では170㎡を調査し、竪穴住居の一部となる可能性がある落ち込みや、柱穴などを発見しました。遺物としては、弥生土器・須恵器・土師器などが出土しています。堂外戸遺跡の広がりを考えていく上で、重要な調査成果となりました。(高橋 健太郎)



調査の様子

### ○金谷城跡(金谷町三丁目)

金谷城は近世拳母城(桜城・七州城)の前身として著名な城であり、鎌倉末期の延慶年間(1308～1310)に中條景長が築城したと伝えられています。城郭は常盤町一丁目あたりを北端とし、今回の調査地点の金谷町三丁目あたりは、城の最南部と考えられています。

調査地は、防御のための柵や建物が設けられたと考えられる曲輪から東に広がる低地へと下る急斜面にあたります。近年、研究者により城の踏査が行われ、斜面に階段状の平地があることが確認されています。今回の調査は、隣接した2ヶ所の宅地造成工事の計画が文化財課に届けられ、その工事に先立っての確認調査です。調査は南部を5月に北部を8月に行い、それぞれ地形測量の後、城域の範囲確認のための掘削を行いました。南部の調査では室町時代に瀬戸市周辺で焼かれたやきものの破片がわずかに出土しました。それ



北部地区の作業状況

に加えて、先に述べた平地の地形は、近年の斜面崩落の残土を引き揚げて造り出したものであり、金谷城の時代に遡るものではないことがわかりました。北部の調査では遺構はみつかりませんでしたが、斜面の堆積状況を確認することができました。(高橋 健太郎)

### ○拳母城(七州城)跡(小坂本町8丁目)

拳母城(七州城)跡の発掘調査は市美術館の建設に伴って1991年に行われて以来しばらくありませんでしたが、隅櫓北部の整備に伴う調査が昨年行われ、今回の市道樹木線の建設に伴う調査と続いています。今回の調査は4～7月に2つの区画に分けて行いました。調査地点は七州城の城郭の南東区域にあたり、黒門と呼ばれた門に近い区画で土手状の遺構と屋敷地と推定される遺構が見つっています。この区画は「七州城図」(牧野敏太郎画・明治20年代頃)にも黒門の近くに屋敷と土手が描かれています。この屋敷地の遺構は後世の攪乱でかなり傷んでいたことと基盤の土の状態がよくなかったことから見つかった溝や穴などが部分的だったり、傷んでいたりして不明瞭な状態でした。そのため、部分的に残った遺構から屋敷地と推定できる程度のものでした。溝や穴からは江戸時代後期の陶磁器や瓦などが出土しました。土手状の遺構は屋敷地の東側に南北に位置して調査区域内ではほぼ江戸時代の状態で残っていました。



屋敷地調査作業中の様子



土手状遺構調査の様子

(杉浦 裕幸)

# 「風外本高展」

## 一人と画と一



「七聖賢円卓図」屏風

### 風外本高について

やわらかな筆使いと動きのある人物表現、おだやかな微笑みの老人、楽しそうな人々の談笑の声が今にも聞こえそうなこの画は、風外本高の作品です。

紅葉で有名な足助香風溪にある香積寺の第25世住職として知られた風外は、こうしたどこかユーモラスで温かみのある人物や淡い色彩の山水画を多く残しています。

風外本高は安永8年(1779年)現在の三重県度会郡南伊勢町押洲で生まれました。天明6年(1786年)8歳の時に出家し、修行のかたわら当時の画僧・月遷の画の模写を試みるなど画に親しみました。その後、但馬(兵庫県)竜満寺の玄楼禅師の弟子となり師に従い宇治(京都)の興聖寺、浪速(大阪)の当陽軒にて修行を重ねました。

### 画の腕を磨く

風外は修行時代に、出雲を訪れた時この地方屈指の豪農である勝部本右衛門尚賢という人物と出会っています。勝部家は池大雅と縁がありその作品も残されているなど代々、書画に対する見識も高くよき理解者となりました。風外はこの時に多くの作品に触れ勝部尚賢の後援を得て画の腕を磨いたと考えられます。こうした事から出雲にも風外の作品は多く残っています。風外は2年間、出雲に滞在しましたが、その後も何度も出雲を訪れ画の腕を磨いていきます。

### 教育者としての風外

風外は単なる画僧ではありませんでした。風外の徳を慕って参禅する人々が多かったため勝部家では、小庵を改築して徳林寺としたほどです。禅の指導者としても多くの弟子を育てています。

文政元年(1818年)40歳となった風外は、大阪の円通院に招かれて住職となりました。その後、足助に来たのは56歳、天保4年(1833年)のことです。足助での風外の事績を伝える逸話として伝わっているのが天保7年(1836年)に起きた百姓一揆(加茂一揆)の時の事です。役人に頼まれた風外は、

参加者に立ちはだかって暴徒の非を諭したといえます。

風外の元に、その徳を慕って参学する雲水は90人以上に上ったといえます。また風外はこの地域のみならず尾張、伊勢、出雲地方へ招かれ各地の寺院で禅の講義を行い、禅僧の指導を行っています。天保12年(1841年)8年間過ごした香積寺を後にして浪速の烏鶺楼に隠棲した時には20人ほども弟子が、従ったといわれています。

### 特別展を開催

特別展では多くの書・画を展示する予定です。現在まで大切にされ伝えられてきた風外の画からは、温かみのある人柄が、勢いのある書からは、禅の教えを貫く強さが伝わってくるかのようです。

この機会に多くの方に風外の書・画を通じてその人柄に触れて郷土の偉人の理解を深めていただければ幸いです。(伊藤 智子)



「一行書」龍虎双幅のうち「龍吟初夜後」

### 特別展

#### 「風外本高一人と画と一」

場所：豊田市郷土資料館  
期間：平成20年1月26日  
～3月2日  
観覧料：300円

# 「地下に埋もれた縄文の森—矢作川河床埋没林—」

開催報告

## ●企画展「地下に埋もれた縄文の森」

この企画展は7月28日～9月2日の会期で開催し、主に2005～07年に調査した矢作川河床埋没林の調査内容と成果を展示しました。埋没樹木を取囲んだ古い環境と歴史について[調査経緯の紹介]・[他地域の主な埋没林]・[樹種分析]・[花粉分析]・[昆虫遺体の分析]・[放射性炭素による年代測定]・[古環境・古地理の復元]・[考古学調査の成果]といった内容の展示をみていただきました。会期中約2,100名の来館者がありました。



展示室の様子

## ●講演会「地下に埋もれた縄文の森」

企画展会期中の8月18日には矢作川河床埋没林調査委員会の副会長も務められた辻誠一郎先生（東京大学大学院教授）による講演会を開催しました。辻先生の講演会ではまず、全国各地の代表的な埋没林として三瓶小豆原埋没林（島根県太田市）、余呉湖・三方五湖一帯の低地帯にある埋没林、富沢遺跡（仙台市・地底の森ミュージアム…2万年前の景観を保存）、岩木川河床埋没林（青森県津軽平野）、猿ヶ森ヒバ埋没林などを紹介していただきました。次に矢作川河床埋没林について平野の河川の活動が穏やかな時代・時期があって、そのときに平野に森林ができた、その代表例であること。そして環境の変化があって上流から土砂が運ばれてきてパックされた環境の変化を伝える大事な例であること。矢作川河床埋没林はナラ・クリ・クワなど広葉樹林で日当たりのよい森林で、よく育った森林であったこと。その中でクリは縄文人の暮らしに重要な樹木であったことが紹介された。日本各地の埋没林を紹介しながら矢作川河床埋没林の重要性・価値を確かめてほしいこと、また各地の埋没林の活用事例をみて矢作川河床埋没林の活用について皆さんで考えてほしいということまで話を締めくくられました。



講演会の様子

また、この日には普段見ることの難しい倉庫に収蔵保管している大型の埋没樹木も公開しました。

## ●報告書『地下に埋もれた縄文の森 - 矢作川河床埋没林調査報告書』

矢作川河床埋没林調査委員会編集の調査報告書です。調査による埋没林の紹介が詳しく述べられています。辻先生の講演会でも紹介していただきましたが、きっと埋没林研究に欠くことのできない報告書となります。皆さんもぜひお買い求めください。

ご購入希望の方は豊田市郷土資料館までお問い合わせください。

（杉浦 裕幸）

## 文化財シリーズ



拳母神社の山車  
県指定  
有形民俗文化財

拳母祭は豊田を代表する祭りです。毎年10月第3土・日曜日の2日間にわたって行われるこの祭りには、江戸時代の下町にあたる8町の山車が出揃い、その勇壮さを競いあいます。

拳母8町の山車といわれますが、天明2年(1782)に下町(現在の駅前周辺)にあった拳母城が、水害により童子山(現在の美術館周辺)へ移転した際、東、南、本町の3町が新しい城の大手門に移り住み、城下町を形成したことにより、現在では下町に残った5町と分かれています。このため祭りの1日目の「試楽」では童子山地区の3町曳き、下町地区の5町曳きとなります。2日目の「本楽」では8台の山車が次々に拳母神社の境内に曳き込まれ、勢揃いして祭囃子を奉納します。そして、午後4時、拳母祭の呼び物である山車の曳き出しが始まります。勇壮な掛け声と囃子の高鳴るなか、紙吹雪が舞い、山車が神社

から曳き出され、各町へと帰っていきます。

拳母神社の山車は、ケヤキかシタンの上材によって作られています。大きさは高さが5.4~6m、長さ3.7~3.8m、幅2.6~2.7mで神明造り(神社形式)幕には歴史的人物や花鳥などが刺繍された大変豪華なつくりとなっています。



## 資料館NEWS

### 縄文土器作りに挑戦しよう!

6月2日(土) 安城市埋蔵文化財センター岡安氏を講師に招き、縄文土器作りを開催しました。

子どもたちは先生に教えて頂きながら、真剣なまなざしで土器をつくりあげました。



23日(土)は、乾燥させた土器を野焼きしました。完成した土器をもった子どもたちの満足気な笑顔が素敵でした。

### 第1展示室リニューアルオープン

修繕工事が終了し、7月28日(土)リニューアルオープンしました。展示内容も変わり、さらに充実した展示をご覧ください。

### 夏休み子ども月間終了

8月1日(水)~8月31日(金)に、「夏休み子ども月間~郷土資料館を探検して歴史にふれてみよう~」を開催しました。暑いにもかかわらず、汗をかきながら火おこし機をつかって火をおこしたり、黒曜石を使ってみたり、展示をみてクイズに答えたりと歴史体験を楽

しんでいました。期間中は2,007名の来館者があり、大盛況に終わりました。

本年度も様々な講座を行いました。その様子を紹介します。

### ★親子史跡めぐり

県指定池田1号墳、城跡公園足助城、旧伊勢神トンネル、伊勢神峠などに行きました。初めて史跡を見学した方も多く、大変喜んでいただけました。



### ★夏休み子ども講座「古代の布作り」

縄文・弥生時代の布を織りました。子どもたちは古代の人が布を織るのにどんなに大変だったか身をもって体験していました。とても素敵な布を織り上げることができました。

### ★夏休み親子講座「まがたま作り」

古代の装飾品「まがたま」を作りました。子どもたちは真剣なまなざしでまがたまを磨いていました。まがたま講座は、毎年人気の講座です。

### ★夏休み親子講座「土偶作り」

粘土をつかって「土偶」を作りました。縄文人にまけないような土偶に子どもたちは満足した様子でした。

## 利用案内

開館時間 9:00~17:00

休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館)、年末年始

入場料 無料(特別展開催中は有料)

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分

愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ 徒歩15分

駐車場 約20台

## ■豊田市郷土資料館だより No.61■

平成19年9月28日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎(0565)32-6561 FAX(0565)34-0095

E-mail: rekihaku@city.toyota.aichi.jp

URL: http://www.toyota-rekihaku.com

※豊田市郷土資料館だよりはHPでもご覧になれます。